

## 悲喜こもごも!??

「こもごも」は「交々」と書く。『新明解国語辞典』によると「交々」とは「二つ以上の事柄が、入れ代り立ち代り現れ続ける様子」とある。

体育祭を大いに楽しみ、部活動の試合に全力を発揮できることは嬉しいことだ。これらを「喜」の代表とするなら、「悲」はさしあたり1学期中間テストであろう。とりわけ1年生にとっては高校最初の定期テストということもあり、緊張を迫られる生徒が多いことと思う。テストが終わって安堵するも束の間、返却された答案にはこれまで見たことのない点数が示され、あるいは、これまで他人事であった「平均点以下」を自分のこととして実感せざるを得ず、啞然となるかもしれない。尤も、啞然となると言い得るほど準備したのか、その準備は十分と言えるのか、という振り返りもまた大切だ。

「喜」の代表としたものの、体育祭では1カ月に及ぶ中味の濃い準備に明け暮れたのだから、当然誰しも勝ちたく思うもの。それゆえ、敗れでもすると大いにへこたれるものだ。部活動の試合もそうであろう。関東大会、インターハイの予選は活動の集大成とも言うべき大会であるのだが、試合の結果によっては、その日が3年生引退の日となる。悲喜こもごもという言葉がまさに相応しい5月である。

体育祭は、実行委員会による準備と当日運営、各色各生徒の準備、練習から当日までの真剣な眼差し、体育祭を盛り上げようとする意識と行動、そのどれもが十分に発現され、素晴らしかった。総合成績などにおいて順位はつくというものの、遜色のある色などある筈もなく、あの体育祭を成し遂げたことに生徒は皆、満足感を抱いて良いと十分に思う。

この体育祭で私自身の反省が二つある。一つはスウェーデンリレー。スターターをさせていただいたので、バトンが誤って渡ったことをほぼ眼前で見ていた。再レースとなったのだが、誤って渡ったときすぐにレースを止めれば良かったと悔やんでいる。生徒は、「足にきている!!」、「えーっ、もう一度走るの!?!」と思ったに相違ないのに、それでも10分の休憩ののち、第1走者から400mを走る最終走者までが皆、真剣に走っていた。そこででの真剣に勝敗に向かう姿には運営側の生徒への優しさも含まれていたと私には思えた。反省のもう一つは閉会式。団長による応援を壇上で受けることができた。でも、私が「ちょっと待ったあ」をかけて、体育祭実行委員長に代われば良かったと悔やんでいる。それにしても、4人の引き締まった顔つきと演舞は最高だった。

体育祭の翌日、数人の生徒からマスコットと応援の審査について質問を受けた。生徒主体の行事ゆえ、実行委員会で答えることと思いましたが、来室しての質問であったので、審査を行った一人としてお答えした。審査は担任クラスを持たない教員とPTA役員が担っている。細かな審査項目ごとの得点を積み重ねる方法ではなく、マスコットと応援それぞれについて、審査員各人が各色に1位から4位の順位をつけるという方法となっている。審査の規準が書かれていないので、私の場合、最初の色の応援を基準として次の色、またその次の色を比較というようにして順位をつけた。集計の上で確定した順位と、自分のつけた順位というのはなかなか合致しないものだ。

応援では、凛々しさや発声の状態、動きのキレ、マスゲーム・ダンスの振りや隊列、そのときの表情、独創性、またマスコットでは、テーマ性、色合い、構図、筆致の状態など、きっと審査にあたる者の視点は多くのところで重なり合うに違いないのだが、それでも順位は異なるようだ。それだけ拮抗しているということであろうし、どの色も見る人を魅了する力を有していたということに違いない。

だから、全力を尽くしたのであれば、誰に憚ることもなく、そのことを誇りにすれば良いことだ。

さて中間テスト。私からの3点は、「全力で挑め」「捨てるなかれ」「あきらめるな」。

昨年来ずっと言い続けていることがある。挑戦する気持ちを持つこと、そのための努力を惜しまないこと、それが光陵生の矜持であると。「捨てるなかれ」と「あきらめるな」は、「逃げるなかれ」と置き換えてよいのかもしれない。芳しい点数がとれなかったとき、決して「なかったこと」にするのではなく、誤ったところをきちんと直して今回のテストの終了とする気概で臨んでほしい。

定期試験もまた、「君は全力で立ち向かったか?」を大切にしたい。